

にわか「大富豪」の豪華な宴

森川 檀弘

大富豪の一行7名は、5月12日「コリアハウス」でソウルでの宴を、盛大に開いた。その一端を、「貧民」のみなさんに報告する。

「コリアハウス」の所在地は、ソウル市南部の南山（ナムサン、安重根義士記念館がある）の北のふもとである。みなさんと別れ、バスを下り（地下鉄駅は忠武路＝チュンムロ）3分も歩くと、極彩色の大門が一行を迎えてくれる。



ところで、コリアハウスとは何たるかを、最初に報告しておこう。

「貧民」諸氏よ、このコリアハウスは、いまを去る数百年前（どうも、はっきりしないらしい）、李氏朝鮮時代からの名家である朴彭年（パク・ペンリョン 1417～1456）の土地に建てられた韓国の伝統的な韓屋（ハノク）で、王宮・景福宮（キョンボックン）の慈慶殿を模した当時のエリートの高級住宅らしい。日本の植民地時代には総督府政府総監の官邸として、韓国政府樹立後には迎賓館として使われたという由緒ある家屋だ。

現在は、韓国文化財保護財団が管理、運営する総合的な施設として、外国人だけでなく韓国内の若者にも韓国伝統文化を伝える役割を担っている。伝統的な建

築様式を見せるのはもちろん、宮廷料理を食することができ、舞踊公演の観覧、土曜・日曜には韓国の伝統婚礼が実際に行なわれているので、見学もできる。大門をくぐった右手には、伝統工芸品を紹介し、同時に買い物もできる「文化商品館」がある。ここでは、匠たちの手になる独創的な焼き物や金属製工芸品なども販売している。見て回るだけでも楽しくなる。

おっと、ホットニュースを忘れていた。館内の一角には、いまNHKテレビで話題の「宮廷女官チャングムの誓い」に出てくる、台所「水刺間（スラッカ）」が再現されていたのだ！ 昔使われていた調理器具、宮廷料理のサンプル、宮中衣装などが展示されている。その奥にはキッチンもあり、35人が同時に講習を受けられる宮廷料理の体験コースが用意されているのには、これまたびっくり仰天した。

このあたりで、いいかげんにしろ！ 早く本題に入れ！ なんて声が聞こえてきそうだ。

さあ、宴の内容を紹介しよう。われわれが選んだのは、夜の部2回目の午後7時20分～8時50分のコース。豪華な宴は、本館の海隣館（ヘムグァン）右手の高台にある聞香楼のなかの20畳くらいの部屋で始まった。聞香定食コースというこのコースは、全30品のスペ



シャル韓定食コースから、「生朝鮮人参」、「粥」、「まつたけ焼き」、「大海老焼き」を抜いたもの。大きな声ではいえないが、大富豪といえども、懐具合には限りがあるのだ。

まずメニューを、とくにご覧あれ。

- ①マルンアンジュ おつまみ。
- ②グジョルパン 九折板。
- ③ジュック おかゆ。
- ④ネンチェ 和え物。
- ⑤ジョンコオ 3色チジミ。
- ⑥サスルジョック・ジャンオグイ 肉と野菜の串焼き・うなぎ焼き
- ⑦シンソンロ 神仙炉
- ⑧コリチム 牛テールの蒸し煮。
- ⑨ジユクソンボッケム 竹の子新芽のフライ
- ⑩カルビグイ 焼きカルビ
- ⑪ミツバンチャン おかず類
- ⑫ジンジ・グック ご飯とスープ
- ⑬フシック デザート

写真だけを見ると、貧弱に見えるかもしれない。しかし、これは最初にテーブル配膳されたもの。以後は、上記の料理が次から次へと運ばれてくるのだ。まず、ビールで乾杯。

最初に味わったのが、代表的な宮廷料理のグジョルパン。器の形が料理名になったという料理。糸のように細く切った牛肉や錦糸卵、5色（赤、黄、緑、茶、白）の野菜など8種類の具を、器の中央のうすいクレープ生地に、包んでタレをつけて食べる。何種類かを組み合わせを楽しみながら味わうことができるので、食がすすむ。

シンソンロは、煙突がついたような神仙炉という鍋に、肉や海産物、野菜などを入れ、汁を注いで食べる



料理。宮廷伝統料理のなかでも、材料（牛肉、キジ、アワビ、ナマコ、シイタケ、セリ、コショウ、松の実、ギンナンなど）を豊富に使う高級料理のため、王侯・貴族以外にはなかなか口に入らなかったらしい。

サスルジョックは、日本でいえば「焼き鳥」か。ジャンオグイは、韓国風「うなぎのかば焼き」。何もつけずに白炭で両面を焼き、唐辛子みそをつけて2度焼きしてある。これが日本のタレで食べるうなぎとの違い。

てな具合で、大富豪一同、大いに満足な一夜であった。

おっと、報告することがまだあった。宴のあとの民俗劇場の観劇だ。美人ぞろいの踊り手たちの花や扇子を持ってのあでやかな踊り、鉦・つづみ・銅鑼・太鼓の4つの楽器を奏でながら踊るサムルノリ、一人で舞い歌うパンソリなどを1時間堪能できた。これで料理と観劇が込みで8700円とは、ちょっと得をした気分だった。

（最後の踊り子との写真は、むらき数子さん撮影）



街の居酒屋へ行きました

加藤 由美子

二日目の晩は、大富豪と大貧民の二つのグループに分かれて食事をしました。「宮廷料理」に向かう大富豪たちを見送った後、私たち大貧民8人は路地裏の居酒屋へと向かいました。実は最初の晩におおよその下見をしてあったのです。前日の夕食のあとホテルの裏通りに出て、街中をブラブラしましたが、その帰り道、おいしそうな料理のレプリカを飾ってある店を覗いて、「明日の晩はこういうお店で、数種類の料理を注文し、一つのお皿を何人かでつまんで食べるのもいいね」と誰かが言い出して、即実行ということになったわけです。

日本にいてもあまり高級な飲み屋を避けて、気楽で案外料理がおいしい居酒屋風の店で時折飲んでいるメンバーにふさわしい場所を探しに、さっそく裏通りへ繰り出しました。適当な店を見つけ中に入りましたが、テーブルのセットの仕方が日本のおそばやさん風で親しみを感じました。

二つのテーブルに分かれて座ったところ、日本で言う突き出しのようなものが出てきて、食べてみると、おでんのような味がしました。飲み物は生ビールにしようとして店員さんに一生懸命話しかけたのですが、日本語がさっぱりの方でなかなか通じません。そこで、私たちの斜め後ろの席で飲んでた男性の手にあるジョッキを指して「あれをください」と言ったところ、その男性がこちらを向いて「どうしました?」。語学



学習で日本に二年間留学していたとのことで日本語が堪能だったのです。例に漏れず親切な韓国の男性は、何一つまともに注文できず困っていた私たちに、料理のオーダーまでつきあってくれました。この男性とは暫く交流し、私たちが韓国に来た目的や「憲法9条」のことなどを話しました。「良いことをなさってますね」と言ってくれましたが、商売熱心というのか自身が扱っている商品の説明をし、名刺まで渡されました。

肝心の食べた料理のことですが、おいしかったのは、「シーフード葱チジミ」と「キムチ卵焼き」かしら。どちらもふわっと柔らかく日本で食べるのとは違った味でした。そのほか、薩摩あげのようなものも結構いけました。温麺を注文したら、インスタントラーメンが出てきたので、皆で笑ってしまいました。その他鍋物やサラダなどあれこれ注文しましたが、ほとんどの料理が辛く、涙をこぼしながらやっと食べた人もいました。韓国の方は良くも毎日こんな辛いものを平気で食べているものだと、感心する一方、それにしてもそんなに辛くしなければならぬのかしら?、幼い子ども達まであれを平気で食べられるのだろうか?との疑問も沸いてきます。

お酒は何がおいしいか、先程の男性に聞いてみたところ「マッコリ」と教えられ、皆で飲んでみましたが、結構いけました。どぶろくのように白く濁ったお酒で、味はさっぱりしていて飲みやすいものでした。

一品ずつボリュームがあり、食べきれない程でしたのに、最後に会計をしてびっくり。一人あたり1300円位にしかならなかったのです。韓国のサラリーマンなどが気楽に立ち寄れる値段なのかもしれません。

食事の帰りに喫茶店に立寄ってコーヒーを飲んだのですが、まったくのアメリカンで決しておいしいとは言えませんでした。それでも、あまりきれいではない店構えや素朴な店員さんにかえて気安さを感じ、良い気分ホテルに帰ってきました。

独立記念館で考えたこと

ハンギョレ新聞記者・Hさんへの手紙

大村 哲夫

Hさん、5月11日の私たちのハンギョレ訪問はあなたにとって突然のことであったに違いないのに、長時間にわたって真摯に語り、耳を傾けてくださいました。そのご好意とお人柄に甘えて、この手紙を送ることにします。あなたにお会いした翌々日、私たちはソウルの南方約80キロ、天安近郊の独立記念館に赴きました。そこで私が感じたこと、考えたことを書いてみたいと思います。

私にとっては1989年12月以来、16年半ぶりの再訪でした。入り口で日本語のリーフレットを渡され、主な展示物には日本語の名称・解説が付け

られています。日本語の「展示品要録」（2000年4月15日初版、04年12月改訂、1万ウォン）も販売されていました。いずれも前回はなかったことです。

独立記念館が完成したのは87年8月15日。「1982年日本の歴史教科書の韓国の歴史歪曲が契機となって、韓国の全国民の募金で設立」（「展示品要録」）されてから20年近い間に、私たち日本人の参観者も徐々に増えてきたということでしょう。別の意味で時間の流れを私が感じたのは、旅のガイドであるイ・ナムスクさんの説明でした。

独立記念館の広大な敷地に足を踏み入るとまず、民族の飛翔を象徴するという「民族の塔」（高さ51メートル）が立っていますね。イさんは塔の形を、鳥の2枚の翼、または祈りをする両手のようにも見えと言った後、「2つに分断されている民族の統一を表しているとも言います。見てください。2つに分かれた塔の基部が、国旗の『大極』と国花のムクゲを浮き彫りにした石板で一つに繋がれているでしょう」と説明しました。

イさんの説明の前半部分は、記念館の公式ホームページ（日本語）の解説とも一致します。しかし後半の説明では、「北」と「南」を同じ高さの塔で表して対等の存在として形象化していることになります。記念



館の建設が始まった83年にはラングーン事件が、開館して間もない87年11月には大韓航空機爆破事件がありました。「民族の塔」は、現在とは比較にならないほど南北関係が緊張していた中で造られたモニュメントです。イさんの説明は、開館当時ではありえなかった解釈であり、北朝鮮に対する近年の、韓国市民の冷静な見方を反映していると私には思えました。

ちょっと考えすぎですね、とHさんはおっしゃるかもしれませんが、この話には伏線があるのです。独立記念館訪問の前日、私たちは板門店ツアーに参加しました。このツアーのガイドのキムさんは実に優秀な方で、彼女の案内によって私たちは多くのものを得たと思います。なかでも私が忘れがたいのは、板門店の会議場で机の上に立てる双方の国旗の「高さ」を両者が競って収拾がつかなくなったというエピソードを紹介したとき、彼女が付け加えた言葉です。「皆さんには滑稽な話でしょうが、私たちには悲しみです」。

日帝侵略館の「悲しみ」

さてHさん、先ほどのキムさんの語りにならえば、独立記念館の展示を見るのは私には悲しみです。いや、悲しみという一語には収まりきれない、やりきれない、いたたまれない、名状しがたい重い気分で、今

回も館内を歩きました（入り口で渡された日本語のリーフレットの表紙には「歴史の息遣い！ 豊かな自然！ 感動と楽しさでいっぱいです」とありました。韓国語をそのまま訳したのでしょうか、これはキツイですね）。

日本で独立記念館のことが語られるとき、誰もが触れるのが「日帝侵略館」の拷問再現展示です。私自身は2度目であり、さらに2日前に西大門刑務所の展示を見ていましたので、不謹慎な言い方でしょうが「免疫」ができていました。Hさんをご承知でしょうが、西大門刑務所の展示は「目」と「耳」の両方に迫ってくるし、刑務所の建築そのものがかもし出す迫力がああります。さらに、壁の漆喰を埋め尽くしていた見学者の落書きが、私には展示以上にショッキングでした。多くはハングルですが、中にはアルファベットも混ざっていて内容は想像がつかます。それに比べて日帝侵略館のほうは、のぞき窓から見る方式といい、絞り気味の音量といい、いわば博物館らしい展示の仕方であり抑圧されていると思いました。

日帝侵略館で私の足が動かなくなったのは、拷問の展示ではなく、「志願兵」や労働者として若者たちが故郷から連れ去られる（まさに「拉致」です）場面を人形で再現したジオラマの近くでした。その前でボランティアらしい女性が、小学生から老人まで20人ほどの見学者たちに解説していました。「オモニ」「アポジ」といった単語がころうじて聞き取れるだけなのですが、耳を傾けている一人ひとりの固い表情を、少しはなれたところから私はじっと見ていました。説明が終わると、かなり大きな拍手が聞こえました。ジオラマの脇では「慰安婦」問題のビデオが繰り返し上映されています。「慰安婦」のビデオは89年にはまだなかったことが確実ですし、ジオラマも見た記憶がありませんから（88年発行の図録にも収録されず）、比較的新しい展示なのでしょう。

展示内容もさることながら、それを見ている韓国人の人々がいて、それをまた少し離れたところから見ている日本人の私がいる。さらに、そんな私を見ている韓国人がいるかもしれない……何本もの視線が交錯する中で身動きが取れなくなってしまう。日帝侵略館は私にとってそんな空間です。

独立戦争館の「意外」

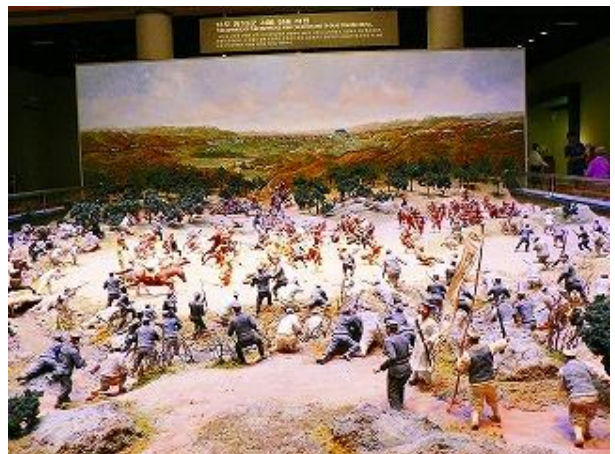
ところでHさん、今回の独立記念館見学で「ああ、そうなんだ」と改めて得心したことがあります。Hさんは「何をいまさら」と嘆息されるでしょうが、しばらくお付き合いを。

ご承知のとおり日帝侵略館は7つある展示館のうちの一つです。日本語のリーフレットによると、その7つは次のとおりです。

①民族伝統館（40分）／②近代民族運動館（40分）／③日帝侵略館（30分）／④3・1運動館（20分）／⑤独立戦争館（50分）／⑥社会・文化運動館（50分）／⑦大韓民国臨時政府館（40分）

（ ）内は見学所要時間で、合計270分。日帝侵略館は全体の9分の1と想定されています。ちなみに私は今回、④まで到達するのが精一杯で、それでも集合時間に遅れてしまいました。私は——そして独立記念館の展示を罵倒する一部の日本人たちも——日本がやったこと（韓国側からすれば「やられたこと」）にもっぱらこだわって観ているのですが、7つの展示館総体の構成は「韓国の人々がいかに闘い勝利したか」を強調しているのですね。言い換えれば、「やられたこと」＝被害の展示は主役ではないのです。不適切な比較かもしれませんが、日本の広島平和記念資料館や沖縄県平和祈念資料館が「被害」の記録・記憶の展示にほとんど終始しているのと、これは対照的です。誤解を恐れずに言えば、韓国の独立記念館とほぼ同じ位相にある日本の施設は、かの靖国神社遊就館かもしれません。

今回の旅に同行した妻は⑥の社会・文化運動館まで観たなかで、⑤の独立戦争館が、韓国人による反日武装闘争をとりあげていたことを強く印象づけられています。独立軍が日本軍に勝利した戦闘を再現する大型ジオラマがあって、見学者はその戦場の只中を歩く



仕掛けになっていたそうです（「展示品要録」によれば1920年10月の北間島青山里溪谷での戦闘）。私自身にも正直なところ「韓国の独立戦争って何？」という思いがあります。なぜ、そうなのでしょう。妻は「韓国の近現代史に目をふさいできたから」と言いました。私もほとんど同感です。日本の朝鮮支配の加害性に自覚的であろうとする日本人の多くは、「革新」「左翼」にシンパシーを持つ人々です。そういう私たちにとって1980年代までの大韓民国は「反共軍事独裁国家」でした。そうした見方が、韓国側が語る建国の物語をうとましく感じさせていたように思います。

端的に言って、独立記念館は国家と時の政権の正統性を国民に植え付けるために造られました。多くの韓国市民の寄付を財源にしたにせよ、チョン・ドハン（全斗煥）政権下、85年施行の独立記念館法に基づいて実質的な国営施設として造られたのですから。そのころ時代は、80年の光州事件から87年の民主化宣言、翌年のソウルオリンピックへと大きくカーブを切っています。それだけに非常に不安定な時期であり、国民統合の装置として最大限利用されたことも確かでしょう。

実際、私が89年に駆け足で⑦大韓民国臨時政府館まで見た印象では、大韓民国政府の正統性と、特に70年代以降の経済発展を無条件に賛美・強調する意図を強く感じました。もっと言えば、絶対的な悪としての日本と闘った韓国（とくにその指導者）は絶対的正義であり、だから成功した、という物語です。そういう物語に反する、あるいは納まらない事象、たとえば北朝鮮の政権樹立に結びつく勢力の動きや、日本敗北＝光復直後に各地で叢生した人民委員会の活動、さらに47年に済州島で数万の民衆が殺された四・三事件などは、展示から排除あるいは避けられていたと思います。

しかしHさん、「しよせん国家権力がつくったものだから」と切り捨てるべきではないと私は考えます。近年、ノ・ムヒョン（盧武鉉）大統領が次々に打ち出した「過去の清算」をめぐる具体的政策について知ると、その思いを強くします。

「国家」が過去に向き合う

Hさん、今回の旅で印象的だったことの一つは、世宗路から見る光化門の景観がずいぶん「すっきり」したことでした。89年にソウルに来たときは、光化門と景福宮の宮殿群の間に旧朝鮮総督府（86年から国立中央博物館）の巨大な建築が、立ちふさがるように建っていました。そのときは「なるほど。植民地時代のことを忘れないためにしっかり残しているのだな」と勝手な思いにふけたのですが、この建物は論争の末、96年末までに撤去されました。今回、光化門をくぐると総督府の跡地は広場になっていて、私たちはそこで



衛兵交代式のショーを見たのでした。付け加えれば、1895年10月10日、駐韓日本公使・三浦梧楼の指示によって日本人暴徒がこの光化門から押し入り、閔妃を殺害します。その現場であった乾清宮では復元工事が進行中でした。

ところで、独立記念館ができて以来、光復節（8月15日）の式典は、敷地の中央に巨大な瓦屋根をいただく「民族の家」で大統領が出席して催されるのが恒例だそうです。しかし昨2005年の式典は光化門前で行われました。光復60年の節目の年という事情に加え、旧朝鮮総督府の撤去と景福宮の復元工事が進んだことも関係していたのではないかと推測します。

それはともかく、この式典でノ・ムヒョン（盧武鉉）大統領は「国民に対する国家機関の不法行為によって国家の道徳性と信頼が大きく毀損されました。国家は自ら率先して真相を明らかにし、謝罪し、賠償や補償の責任を尽くさねばならないでしょう」などと演説しました。以下、文京沫さんの近著『韓国現代史』（岩波新書、05年12月刊）に従って、この演説の背景を見ていきましょう。

すでに、光州事件（80年）の真相解明に道を開いた「五・一八特別法」がキム・ヨンサム（金泳三）政権の95年に成立。済州島の四・三事件についてもキム・デジュン（金大中）政権の99年に特別法が成立し、03年10月には国家権力の誤りを認めた「四・三事件真相調査報告書」が確定、ノ大統領が謝罪していました。さらに04年には、朝鮮戦争の民間人虐殺の被害者救済にかかわる法律、植民地期の強制連行などにかかわる特別法、1世紀以上前の甲午農民戦争（東学党の乱）参加者の名誉回復などに関する特別法、植民地期の「親日反民族行為」真相究明のための特別法が相次いで成立しました。

そして、05年5月にはこれらの特別法を総括する「母法」として「過去史法（真実・和解のための過去史整理基本法）」が国会を通過・成立したのです。この法律は、植民地期から軍事政権期にいたる時期の

人権蹂躪、疑問死、テロなどの全ての事案に適用して真相究明・責任追及・補償を効率的に実施しようとするもの、と文京沫さんは評価しています。

国会審議の過程では、パク・チョンヒ（朴正熙）元大統領の娘であるパク・クネ（朴槿恵）さんが代表の野党ハンナラ党が激しく抵抗したが、05年3～4月に日本側に起因する事態が「法案成立の追い風」になったと、文京沫さんは言います。すなわち、島根県の「竹島の日」条例や扶桑社の歴史教科書問題をめぐって対日批判が盛り上がり、過去を忘れようとする日本人・日本社会のあり方が「反面教師」となって、韓国人の過去に向き合おうとする意識が改めて喚起された、というのです。

Hさん、あなたにとっては先刻ご承知のことばかりでしょうが、私はこうした韓国政府の取り組みに驚きと羨望を禁じえません。独立記念館には、特別法の対象とされた1894年の甲午農民戦争（東学党の乱）のジオラマがありました。農民軍が日本・朝鮮連合軍と戦っている場面です。この展示自体、農民軍の戦いを高く評価する意図をこめたものですが、特別法は、日本軍とともに農民軍に敵対した当時の朝鮮軍の行為を問い直す意味も持っています。国家として過去の歴史と向き合う取り組みは、独立記念館の展示物がガラスケースの中におとなしく納まっていることを許さないでしょう。

民主主義への「渇き」を共有できるか

Hさん、5月11日にハンギョレの社屋の屋上であなたと話したとき、私は「Hさんの語る韓国語は分からないけれど、『民主主義』という言葉だけは、日本語と共通する言葉として印象的に聞き取れた」と言いました。そのとき、うまく説明できなかつたのですが、私の頭の中には、ひとつの歌の記憶が浮かんでいました。キム・ジハ（金芝河）作詞の「灼（や）けつく渇きで」（井手愚樹原訳小田健也補作詞安達元彦作曲編曲）という曲です。日本人の作曲で、日本のシンガーソングライター・横井久美子さんが歌っています（横井さんの自主制作アルバムLP「おいで一緒に」1987年に収録、CD「VIVA KUMIKO」2003年に再録）。おそらく韓国では歌われなかつたと思われるが、元の詩はご存知かもしれません。こんな歌詞です（歌詞カードが行方不明のため大村がCDから聞き取って書き起こした）。

**夜明けの裏通り／呼子の音、長い悲鳴
よみがえる血まみれになった友の顔
灼（や）けつく胸の記憶に／むせび泣き息殺して
ひそかにお前の名を書く、民主主義よ
お一民主主義よ、お一民主主義よ**

**明けやらめ裏通り／ふるえる手、ふるえる胸
こみあげる怒りをこめて板切れに
灼けつくような渇きで／灼けつくような渇きで
ひそかにお前の名を書く、民主主義よ
お一民主主義よ、お一民主主義よ
マンセー（万歳）、マンセー、民主主義マンセー**

曲としては最後の「マンセー、マンセー」というリフレインがまず耳に残ります。しかし、詩の眼目は「灼けつくような渇きで、ひそかにお前の名を書く」でしょう。しかも、「板切れに」書く、というのがすごい。

Hさん、私はこの詩と曲に二つのことを思います。一つめは、韓国語と日本語に同じ「民主主義」という言葉があることは事実ですが、私自身がいま、この詩の「灼けつくような渇き」をどれだけ共有しつつ「民主主義」を口にできるか、という自問です。あるいは、不遜を承知で、主語を「日本の市民が」と差し替えて問うてみてもよいでしょう。いずれにしても私の答えは否定的です。

韓国ではどうなのか。詩は、作者のキム・ジハ自身が逮捕され死刑判決を受けた74年の民青学連事件の頃の時代を色濃く反映しています。いまや韓国でも、その時代はかなり遠い過去なのかもしれない。しかし、韓国では政府がその過去と向き合い、そのための法律をつくった。ひそかに板切れに書かれるだけだった民主主義は、30年を経て法律の中に堂々と定着されたと言えるのではないかと。それを可能にしたのは、「渇き」を共有し受け継いでいる韓国の市民の力ではないかと私には思えるのですが、いかがでしょうか。

二つめは、たったいま書いたことと矛盾するようですが、「灼けつくような渇き」を共有した日本の市民たちのことです。1973年から88年まで『世界』に連載された「韓国からの通信」は、2003年になって筆者「T・K生」がチ・ミョンガン（池明観）氏（当時・東京女子大教授）であったことが公表されただけでなく、故・安江良介編集長を始めとする有名・無名の日本市民の協力で、その危険極まりない企てが支えられていた事情の一端が明らかになりました。危険を冒して韓国から持ち出された資料に基づく『世界』の連載は、ひそかに韓国に持ち込まれ、すり切れるまで読まれたといえます。このことは幸い、03年に韓国の多くのメディアが報道したようです。

とっぴな発想でしょうが、何十年後かに独立記念館または歴史博物館に、キム・ジハの詩や日本で作られた歌のCDや、『世界』が展示されることはないのでしょうか。「民主主義」への渇きと闘いが国の境を超えた証しとして。

再び「日帝侵略館」にて

Hさん、思いのほか長い手紙になってしまいました

た。最後に、あえてお尋ねしてみたいことがあります。他にもない、独立記念館「日帝侵略館」の「拷問」展示にかかわることです。

独立記念館が開館した1987年8月15日の数ヶ月前は、じつは韓国の民主化闘争の歴史でも最大の盛り上がりを見せた時期でした。チョン・ドハン政権は6月29日、大統領直接選挙制への改憲、言論の自由の保障、地方自治制の実施、反体制活動家の赦免・復権などを盛り込んだ「六・二九民主化宣言」の発表に追い込まれます。そして、この闘いのきっかけになったのが、同年1月のソウル大生拷問致死事件でした。他の手配中のソウル大生の居所を迫及する警察が水責めや電気拷問でパク・チョン Chol (朴鐘哲) 氏を死なせたことが検死医などの証言で暴露され、国民的な怒りを持ったのです(文京沫著『韓国現代史』)。

Hさん、私は独立記念館開館の年のこのような出来事を持ち出すことで、日本の官憲の所業を帳消しにしようとするものでは、もちろんありません。それはご理解いただけるのではないのでしょうか。それでもなお「日帝侵略館の拷問展示を見る韓国人の人々の意識に、軍事政権下の拷問はダブルイメージにならないのか」と、小声で尋ねてみたいのです。拷問という人権蹂躪の極にある行為を、民族対民族・国家対国家という対立の構図の中だけで見るのではなく、軍事独裁・非民主政権に共通する悪として普遍的な視角から捉えることはできないのでしょうか。

もっとも、かつて日本の支配下にあつて独立後、開発独裁などと呼ばれる強権政治が続いた例はアジアに少なくありません。フィリピン、インドネシア、台湾……いずれの国・地域でも反体制運動はさまざまに暴力で弾圧されました。それを日本支配の「負の遺産」と見ることも必要です。負の遺産は、遺した側でまず清算しなければなりません。しかし、日本国内での官憲の暴力を日本人自身がきちんと裁き克服しえたのか。それさえ、おぼつかないのが実情です(最近も日本の裁判所は「横浜事件」という戦



時下の言論弾圧事件に正面から向き合うことを回避しました)。

そういう日本の状況を多少とも自覚しているので、私の問いかけは「小声」にならざるを得ません。一方で近年はインターネットという空間に、とくに若い世代が「大声」で相手を罵る言葉があふれています。その対象は、韓国や北朝鮮、中国であることが少なくありません。日本人のネット利用者と、「ネティズン」(ネットとシティズン＝市民の合成語)が政治の改革に大きな役割を果たしつつある韓国のそれとを、同じように見ることは誤りでしょう。ただ、今回の旅で見た、西大門刑務所の壁を埋め尽くしていた落書きは正直、不気味でした。日本の若者たちがネットで発する罵声と、あの落書きが「呼応」していなければよいが、と切に願います。

Hさん、17年近くを経て独立記念館を再訪して、私が一番強く意識したのは、何が展示されているかということよりも、展示を見る「視線」に関わることでした。歴史への向き合い方によって、展示は(しばしば当初の展示意図を超えて)意味を変えてゆきます。私たち日本人とHさんたち韓国人(もちろん個人差も大きいけれど)は、同じモノを見ていても、受け取っているものは同じではないことも改めて感じました。しかしそれでも、違いを互いに意識しながら、両者が割合に近い距離で対話しうる条件は、かなり整ってきているのではないかと、とも思いました。その条件の多くは韓国の皆さんがつくってくださったようですが。

そのような対話が実践され実を結んだ例を、すでに私たちは持っています。2005年5月に刊行された日中韓共通歴史教材委員会『未来をひらく歴史 東アジア3国の近現代史』(日本での出版社は高文研)です。3国で同じ内容で刊行された、この本を手引きとして、日本人が韓国の独立記念館を訪ね、韓国人が広島平和記念資料館や沖縄県平和祈念資料館を訪れる。なかなか魅力的な試みではないでしょうか。

そんなことを夢想しながらページを繰るうちに、うれしい発見をしました。『未来をひらく歴史』の韓国での出版元は、Hさんが勤務されるハンギョレ社の出版部なのです。

Hさん、私の勝手な思いに長々とお付き合いいただき、本当にありがとうございます。ソウルか東京でゆっくりとお話ができる機会があることを願いつつ、筆をおきます。

柳寛順(ユガンスン)の生家

箱田 こうこ

韓国を訪れて3日目(13日・土)、調布憲法ひろばの一行は、朝9時にホテルを出発、バスで独立記念館とユガンスンの生家へ向かう。重たい気分と裏腹に、薫風が鼻をくすぐり輝く新緑がまぶしい。土曜日は片側5車線の1レーンが大型車専用になり、渋滞する乗用車群を尻目に私たちの小型バスは快調に飛ばす。

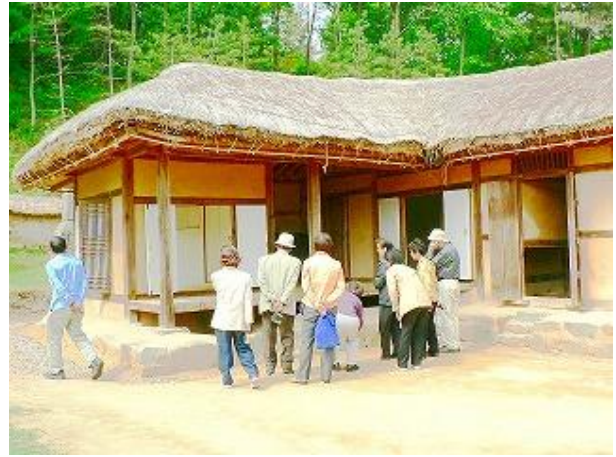
まず訪れた「独立記念館」を消え入りたい思いで去り、次はユガンスンの生家へ向かう。一昨日に訪れた西大門刑務所の、「柳寛順窟」ともいわれる独房は全体がほぼ1メートル強四方で、「天井が1・43メートルと低いため中腰で過ごすしかない」という説明書きがあり、立つことも横になることもできない。その地下監獄の陰気な光景が未だぬぐえない。

穏やかな丘陵地帯は緑におおわれ、タバコやチョウセン人参の畑がひろがっている。懐かしいようなのかな田舎の風景が静かにたたずんでいる。ユガンスンの生家もそんな風景の中に眠ったようにある。そこは、ソウルから車で飛ばして1時間ちょっとの、忠清南道天安郡龍頭里(チュンチョンナムドチョナンゲンヨンドリ)といわれる所だ。

おとぎ話にでてくるようなかわいらしい小さな家である。こんなに静かな地のこんなに愛らしい家から、烈士と讃えられ、韓国のジャンヌ・ダルクとも喩えられる少女がでたのが不思議な気がするほどだ。

わら葺と土壁のオンドル付きの農家である。オンドルとはどんなものなのか見たいと願ってきたが、まさかユガンスンの生家で見ることになるうとは、家は独立運動の鎮圧後日本官憲によって焼き払われ、改めて復元されたものとのことだ。

ユガンスンは韓国のジャンヌ・ダルクと喩えられているが、ジャンヌ・ダルクは神の「声」によって決起



した少女だ。ユガンスンにも神の啓示があったのかという戸惑いがあったが、16歳のユガンスンの三・一独立運動への参加のきっかけは彼女自身の環境の中にあった。

『観光コースでない韓国』(高文研)の「柳寛順の生家—韓国のジャンヌ・ダルク」は丁寧に調べられていて具体的な内容に信頼できる。旅のよきガイドになった。ユガンスンについて参考にさせていただくと・・・

民族教育の必要性を痛感していたユガンスンの父・重権は、民族学校を設立するが生徒が集まらず、300円の借金が手元に残ってしまった。高利の300円はまたたく間に3000円とふくらみ、返済を迫る日本

人高利貸しが毎日家を訪れ、暴行を加える日常だった。彼女の中に反日が芽生えたのは、そうした環境が影響をあたえた。1910年の日本の武力による韓国併合以来、地方にも日本人憲兵、巡査、高利貸しなどが大手をふって歩いていた。このような素朴な田舎にも日帝は管理の目を光らせていたのだ。

重権は進歩的思想の持ち主であったという。友人と共に部落に教会を造ったとあるが、ユガンソンの生家の隣にある小さな教会がそうなのだろうか。道路に面した一階がユガンソンの記録を展示している。

ユガンソンは聡明で活発な少女であり、宣教師のアリス・H・シャープはユガンソンをソウルの梨花学堂に学ばせたいと考え給費生として推薦。1916年4月、13歳で普通科3年に編入した。梨花学堂でも模範生であったという。寄宿生活をしながら、ピアノ、アコーディオン、ミシンを習った。嬉々として学ぶ少女の姿が浮かんでくる。少女らしい一時であったろう。そして日本の支配に対する批判、ロシア革命の動きウィルソン米大統領の民族自決政策なども学んでいった。

ユガンソン16歳の1919年3月1日に「3・1独立運動」が起こった。ユガンソンは同級生と太極旗をつくりデモに参加する準備をしていたが、学校側から禁止されることによりキャンパスから出ることができなかった。3・1運動は学生のデモ参加者が多いことから総督府は各学校に休校を命じた。

3月13日故郷に帰ったユガンソンは、蜂起の日と決めた4月1日、数千の群衆は並川(ピョンチョン)市場に集まり、ユガンソンは太極旗を配り、「私たちは団結しなければなりません。三千里江山に響きわたるまで万歳を叫びましょう。大韓独立万歳！」と堂々とした演説を行った。憲兵隊は無差別銃撃をおこない、刀を振り、あたりは一面の血の海と化した。後に「並川事件」といわれる惨劇が繰り広げられた。この日ユガンソンの目の前で両親が殺された。ユガンソンは捕えられ、亡くなるまでの6ヵ月間陽の下



で過ごすことはなかったのだ。栄養失調と地獄のような環境、日夜の拷問に屈することなく徹底的な抵抗をしたといわれる。朝に晩に「万歳」を叫び仲間を励ました。祝賀恩赦の際も適用除外され、10月12日獄中で息を引き取った。未だ16歳の少女だった。最後の言葉は「日本は必ず亡びる」だった、という。

「こういった英雄を民衆は連綿と語り継いできた、そして新たな闘争の跳躍台としてきたのではなかったかと…」とインターネット上にあり、添えたい。

ユガンソンの写真がある、コピーだが。逮捕されたときののだろうか。着衣の右胸に数字、囚人番号なのか、左に漢字で柳寛順と書かれている。西大門でも古里の教会の部屋でも見たが、あの目を忘れることはできない。コピーのコピーで写りはよくないが、目の光だけは90年を経てもまるで生きているように、激しく訴えかけてくる。怒り、悲しみ、恨みをこめて。生家に近い柳寛順烈士記念祠のユガンソンの肖像画が書き改められるそう。拷問のせいでむくんでいるからだ。そうなのか、と思う。このコピー写真のユガンソンの顔も目ははれているのだ。梨花学堂の同級生たちと撮った写真は細面のきりっとした顔だ。

この眼差しを決して忘れまい、とユガンソンの里を去った。